

精神障害を中心とした地域活動支援事業における就労体験が及ぼす効果

～ 正の強化を意識したアプローチの考察 ～

滋賀県立リハビリテーションセンター支援部 ○藤田京子 中井秀昭 宮本昌寛
社会福祉法人さわらび福祉会 支援センターこのゆびとまれ所長 金子秀明

平成25年4月より障害者総合支援法が施行され、障害に関わる支援が市町村を中心に展開されている。その中でも、「地域生活支援事業」の担う役割は幅広く、そこに事業利用者の特徴も関連し、地域生活支援事業からそれぞれのニーズ・持つ力に応じた自立に向けた取組を行うことが難しい状況がある。

そこで、「スモールステップをイメージした就労機会の創設」と、「そこに導くまでのプロセス、対象者の心的葛藤、体験を通じての心理的变化」をモニタリングし、現状の支援体制では関わるのが難しい対象者への支援のあり方を考察する取組として、トークン・エコノミー法を活用した就労体験が実践されることとなった。本研究は、取組を通して生じる「対象者の心的葛藤、体験を通じての心理的变化」を調査し、対象者の変容を質的に分析し、就労体験がもたらす効果の仮説を生成することを目的とし、実施した。

5人の対象者に半構造化面接を実施した。結果、当初は、病状・体調の変動や仕事に対する悲観的な思いなどから「漠とした仕事のイメージ」があるのみであったが、具体的な就労体験を経験することで、仕事のやりがいなど、「仕事に対する多元的な意味」を見出し、内発的動機づけが生じることがわかった。また、トークン・エコノミー法を活用した就労体験が、「介入することが難しいケースへの接点づくり」と「仕事に対する漠としたイメージからの離脱」という点で大きな効果をもたらしたと考えられた。

つまり、「具体的、且つ明確な提示を行う外発的動機づけが行動化に対し強く作用する」ということ、その次の展開として支援がつながるためには、「行動の中で多様な動機づけを得ること、特に内発的動機づけを得ることが、支援がつながるプロセスに求められる」ということが、生成された仮説と言える。

今後は、本仮説が検証できるような就労体験プログラムの検討と、今回の調査対象者についての縦断的な研究が必要である。

I はじめに

平成17年に障害者自立支援法が成立し、平成25年4月より障害者総合支援法が施行された。現在の障害に関わる支援は、市町を実施主体として、「介護給付」、「訓練等給付」、「自立支援医療」、「補装具」、「地域生活支援事業」の5つのカテゴリーを軸に、利用者のニーズに応じた支援が構成される仕組みとなっている。その中でも、「地域生活支援事業」の担う役割は幅広く、個別の相談対応、対象者の居場所の提供、社会参加に向けたきっかけづくりなど、その後の地域生活における基盤となる支援を行っている。しかし、地域生活支援事業利用者の特徴として、障害受容の状況や支援ニーズなどの個別性が高いことから、利用者が求める地域生活や社会参加のあり方をなかなか見出すことができず、地域生活支援事業から、それぞれのニーズ・持つ力に応じた自立に向けた取組を行うことが難しい状況がある。その結果、何らかの支援につながったものの、その支援の場で状態が滞る、「支援内での滞留」が生じている。

精神障害を中心とした地域生活支援事業では、対象者を「心の悩みがある方」と幅広く受け止めているため、精神病圏の対象者はもちろんであるが、発達障害や神経症圏、要因が不明確であるが対人関係不安等で社会との接触が希薄となっていた者まで、多様な状況の者が利用している。地域活動支援事業では、活動として、集団になじみにくい方へのマンツーマンのケースワークから、小グループ活動、グループ活動と、集団援助技術を活用したSSTプログラムを展開している。しかし、利用者の多くは就労挫折体験を持ち、自己肯定感の低下が予測される。失敗体験の強い刷り込みにより、「どうせ、自分はいまうまくできない」という思いから、ひきこもりがちな生活を送る者も少なくない。障害に関わる支援の中では、福祉的就労がステップアップの場として位置づけられるが、そのステップさえも、「生活リズムの安定」と「最低でも半日程度の集中力と体力があること」、「他者とのコミュニケーションができること」が求められ、支援活用に対し、高い壁を感じざるを得ない利用者がいる状況である。

そこで、「スモールステップをイメージした就労機会の創設」と、「そこに導くまでのプロセス、対象者の心的葛藤、体験を通じての心理的变化」をモニタリングし、現状の支援体制では関わるのが難しい対象者への支援のあり方を考察する取組として、トークン・エコノミー法を活用した就労体験が、社会福祉法人さわらび福祉会支援センターこのゆびとまれ(以下より、支援センターと標記)で実践されることとなった。

本研究では、支援センターの取組を通して生じる「対象者の心的葛藤、体験を通じての心理的变化」を調査し、対象者の変容を質的に分析し、就労体験がもたらす効果の仮説を生成することを目的とする。

II 方法

1. 調査方法

支援センターで行われる就労体験(以下より、メンテナンス事業と標記)企画に参加した者に対し、本人の同意のもと、半構造化面接を実施した。

調査は、メンテナンス事業参加初期(初めての参加～2・3回程度の参加回数の間)とメンテナンス事業参加終了時(平成26年1月末)に行い、メンテナンス事業に参加した動機(終了時では「参加

した感想」・事業を通して得たいこと(終了時では「メンテナンス事業で経験したうれしかったこと・辛かったこと」・今後の支援に何を望むかなどを中心に聞き取った。なお、面接内容は本人の了解の上で、ICレコーダーで録音し、併せてメモをとった。

2. 分析手順

分析手順は、調査によって得られた会話を電子化し、その内容を読み返しながら各事例の変化をとらえると共に、各事例に共通したエピソードを抽出し概念化することとした。また、その概念を重ね、対象者の辿るストーリーラインを生成した。

なお、分析については共同研究者2名の協力を得、妥当性を検討した。

III 結果

1. メンテナンス事業内容

メンテナンス事業は、支援センターによって企画され、支援センターの利用登録をしている者に対して行われた。作業内容は Table 1 のとおりであり、対象者の性別、支援センターに来ることができる曜日や回数、病状や体力などを考慮して設定された。事業内容詳細については、支援センターが執筆した調査・研究事業成果報告書を参照されたい。

また、メンテナンス事業では、支援センター職員が行う際に1時間程度を必要とする内容を1単位とし、1単位当たりにつき730円(平成25年現在の滋賀県の最低賃金)を賃金として支払うこととした。当賃金については、行動療法の一つとして活用される、トークン・エコノミー法を意識し、設定している。

トークン・エコノミー法は、適切な反応に対してトークン(代用貨幣)という報酬を与え、目的行動の生起頻度を高める行動療法の技法である。トークンは、一定量に達すると特定物品との交換や特定の活動が許されるという二次的強化の機能を果たす。主に、特別支援教育・精神科リハビリテーションの分野で活用されており、例えば小林(1984)は、不登校への支援においてトークン・エコノミー法の実施効果を報告し、須藤(2010)は、自閉性障害児の援助行動獲得に対するトークン・エコノミー法の作用について、一場面の行動変容のみでなく家庭での行動の般化も踏まえた調査と考察を行っている。

メンテナンス事業では、トークンを代用貨幣ではなく実際の貨幣を用いて行うことで、「労働の対価として得られる賃金」という意味合いを持たせ、その存在によって対象者の行動にどのような変化が生じるかに着目した。

また、対象を支援センター利用に積極的でない者とし、「賃金が得られる」という設定が支援利用の動機づけとしても作用するのではないかという予測のもと、実施した。

Table 1 メンテナンス事業作業内容

作業場所	所要時間	作業人数
男子トイレ	10時～11時 (作業が終わり次第終了)	1人
女子トイレ		1人
障害者用トイレ		1人
喫煙室		1人
玄関		1人
ゴミステーション		複数名
その他(窓ふきや草引きなど)		1人

Table 2 調査対象者

対象者	年齢	性別	疾患名	就労経験
A	30代後半	男性	統合失調症	あり
B	30代前半	女性	脳外傷・高次脳機能障害	あり
C	30代後半	男性	統合失調症	あり
D	50代後半	男性	てんかん	あり
E	30代前半	男性	統合失調症	不明(本人はありと述べる)

2. メンテナンス事業対象者の選定

対象者の選定は、支援センター職員によって行われた。「現在、支援センター利用に対し消極的であり、関わることになんらかのきっかけを要する者」、「メンテナンス事業の趣旨に合意が得られ、必要な手続きがとれる者」を中心に、支援センター利用登録者内で事業対象者選定が行われ、選定に基づき支援センター職員による個別面接、もしくは家庭訪問が実施された。その結果、本人及び家族の合意が得られた者を対象者とし、メンテナンス事業を実施した。

3. 本調査対象者の選定

メンテナンス事業対象者は7名であり、本研究では同意の得られた5名のメンテナンス事業参加者に調査を実施した。調査協力者の詳細は Table 2 のとおりである。

4. 調査内容の結果

1) 個別事例の概要

Aさん(30代後半 男性 統合失調症)

注: 支援センターこのゆびとまれ作成成果報告書中のHさんと同一人物である。

仕事の経験はあるが、発病をきっかけに継続できなかった。幻聴などがあったが、薬の副作用や「この症状はどうすることもできないのだろう。」という思いから、継続した精神科通院ができていなかった。また、対人関係については、もともと苦手意識を持っていた。

支援センターの介入をきっかけに通院ができるようになり、幻聴が消失、通院・服薬の必要性を感じたため、現在は継続した医療機関受診ができています。

メンテナンス事業に対しては、「気になっていた症状も落ち着いたので。」「なんとかしなきゃという焦りの気持ちがあつて。」「自分でやろうと思っても足踏みしてしまうので、仕事の練習ができればいいなと思って。」という気持ちで参加し、メンテナンス事業終了後には、「仕事は生きるために普通の事だと思う。でも、それができてないことが苦痛だった。」と語り、今後も何らかの仕事をするための練習となるような取り組みがしたいとのことで、作業所利用を考えていると語った。

Bさん(30代前半 女性 脳外傷・高次脳機能障害)

注:支援センターこのゆびとまれ作成成果報告書中のKさんと同一人物である。

学生時代に受傷、以降リハビリを受け就労するが、数か月しか継続できなかった。その後も就労に向けたサービスを利用するが継続できず、現在に至る。「障害に対し、バリアがある。」と語り、障害のサービスをあまり利用したくないと思っていた。

仕事に対して「自分のタレントが活かせるところ。」という思いを持っているが、それが何かという具体的なイメージは出てこない。賃金が得られることをメリットに感じ、母親からの勧めもあって、メンテナンス事業に参加した。

メンテナンス事業開始当初は、「お金がもらえなかったら、この事業は乗り気じゃなかった。」「親に色々と言われているけど、特に仕事について考えてはいない。」と語っていたが、メンテナンス事業終了後には、「褒められるというか・・・頑張りましたねって言ってもらえることが嬉しい。」と賃金以外の面でも作業のやりがいを感じていた。また、賃金に対しても「障害年金だと、それは他の人から分配されているお金。自分で働いて、お金を払うということは楽しいというか、気持ちいい。」と、他の意味を見出すこととなった。今後は「作業所でやっている箱折りの作業をしてみたい。」「一般企業でメンテナンスの就職がしたい。」と語り、仕事に対して意欲を見せている。

Cさん(30代後半 男性 統合失調症)

注:支援センターこのゆびとまれ作成成果報告書中のGさんと同一人物である。

家族と連絡を絶ち、職を転々としていた。発症時期は不明であるが、安定した服薬ができておらず、体調を崩し実家に戻る。

仕事に対しては、「お金を稼ぐためにすること。」とし、「お金を稼ぐのは生活のために必要だから。」と理解している。そのため、実家で生活している現在は、「お金の心配がないので、働かなくてもよい。」と考えている。支援センターの利用に対しては、「することがないから。」という理由で積極的ではない。しかし、家で何か楽しむことができる活動があるという状態でもない。また、「自分にあつた仕事が見たい。」と語るが、それが何かという問いには答えることができない様子であった。

メンテナンス事業に対しては「家でいるのも暇なので、やってみようかなと思った。」と参加。メンテナンス事業終了後は「春になったら、仕事を探そうと思う。」と語る。しかし、やりたい仕事や採用形態、今後の予定について具体性がなく、漠然と職探しをイメージしている状況である様子であった。

Dさん（50代後半 男性 てんかん）

注：支援センターこのゆびとまれ作成成果報告書中のFさんと同一人物である。

就労経験があることに對し自信をもって語るが、本来自身のなりたかった職業に就くことができず、「仕事は病気によって捻じ曲げられた。」とも語る。病状については服薬でコントロールできているものの、副作用の症状が辛い様子であった。本人なりの思いやルールがあり、支援センターやグループホーム内で、時々対人関係を中心としたトラブルが生じている。

メンテナンス事業については「最低賃金に則っているのがよい。」「障害のサービスの応益負担には耐えられない。」と語り、金銭面的な動機づけが強い様子。メンテナンス事業中、複数で行う作業について、それぞれの思いのすれ違いから怒りを見せる場面があった。メンテナンス事業終了後は体力が続かないことを訴え、「この事業がなくなってしまうたら、困る。」と主張することがほとんどで、今後の行動に対する意識付けまではできてない。

Eさん（30代前半 男性 統合失調症）

注：支援センターこのゆびとまれ作成成果報告書中のJさんと同一人物である。

ほとんどの質問に「はい。」「いいえ。」で回答し、自発的な発声は少なく、疎通性も悪い印象を受けた。自転車を使って支援センターを利用することができるが、本人のみでは足が向かず、父母の仕事が休みの曜日限定で、支援センターを利用していた。

メンテナンス事業について、面接調査時は「誘ってもらったときは嬉しかった。」「みんなのために働けることが嬉しい。」と語るが、支援センターには家族送迎があるから来ている印象が強く、積極的な本人の意思はないようにみえる。様々な事柄の時系列や内容について、質問をするたびに答えが変わり、本人の主張と実際の行動（支援センターの利用曜日、今までの職歴など）が曖昧なため、本研究内では状況が掴みきれなかった。

年齢を考慮すると、この状況までの思考力低下が著しいケースは珍しく、統合失調症以外の要因も考えられ、病理の面から再アセスメントをする必要性を感じる。

2) 各事例から抽出した概念と生成されたストーリーライン

概念の抽出は、各事例の調査内容を、「メンテナンス事業参加初期の語り」と「メンテナンス事業参加終了時の語り」と分け、さらにメンテナンス事業参加終了時の語りについては「メンテナンス事業をきっかけに、今後の就労などの展開について具体的な意思を示した」という結果によって、「意思を示した者」、「意思を示していない者」と2群に分けて行った。

また、それで得られた概念を重ね、ストーリーラインを生成した。以下より、各概念の説明とストーリーラインを示す。

①メンテナンス事業参加初期の語り(A・B・C・D・Eさん)から抽出した概念

メンテナンス事業参加初期の語りから抽出した概念は5つであり、具体的な語りの例は Table 3 のとおりである。以下より、各概念の説明を示す。なお、概念名は、【 】と記載する。

Table 3 参加初期の語りから抽出した概念の具体例

概念名	具体例
仕事に対する一元的な意味づけ	いや・・・僕からやめることが多かったですね。＜理由は？＞お金が貯まると働きたくなくなる。
理想の仕事像の曖昧さ	＜仕事に対する希望はありますか？＞自分にあった職場があればいいかなと思っている感じです。＜自分にあったってどんな？＞・・・わかりませんかね、自分では。
仕事における失敗・挫折体験	人間関係が苦手で、仕事をやめるきっかけの一つでもあるんで。
仕事に関連した実現できない思い	事故にあうまではビルディングとかでバリバリ仕事をしたかったんですけど。今は事故にあって、そんなの無理だし。だから、できれば働きたくないなって思っているんですけど。
病状・体調に対する不安	今、年いってきたから、ずっと薬飲んでるから、薬が蓄積されてきて、あれ・・・薬の蓄積による副作用が・・・。

【仕事に対する一元的な意味づけ】

本概念は、仕事をする意味に対し、「お金を稼ぐため」、「生活するため」というような対象者なりの意味を見出しているものの、そのあり方が単一である、もしくは漠然としている状況を指す。そのため、仕事に関する自身の在り方に対し、先の見通しの悪さや、極端な思考の整理が生じることが示唆される。

【理想の仕事像の曖昧さ】

本概念は、仕事をしたいという思いを持っているものの、自分により良いものを求めたいという概念的な思いに留まり、職種や勤務形態、業務内容などの具体的な理解まで達していない状況を指す。調査時には、複数の対象者が「自分にあつたことがしたい」と述べるが、例えばどのようなことかという質問に対しては答えることができなかった。理想とする形が曖昧で、行動化に結びつかないことが示唆される。

【仕事における失敗・挫折体験】

本概念は、過去の仕事場面で生じた「失敗体験」、またそれに伴う仕事を継続できなかった「挫折体験」が存在することを指す。病状や対人関係などでうまくいかなかった経験が存在し、またそれを乗り越え何かを達した経験が積めていないため、「うまくいかないだろう」という結果しか予想できない心境が示唆される。

【仕事に関連した実現できない思い】

本概念は、仕事に関連した内容で、実現したかったができなかった思いに囚われ、現状の中で何ができるかという思いに考えを展開することができない状況を指す。特に、本研究の対象者は精神障害者であり、主たる障害は中途障害である。そのため、「病気にならなければ、こんなことにはならなかったのに。」という思いが強く、今できることを考えようという実現可能な思考に切り替えることが難しいことが示唆される。

【病状・体調に対する不安】

本概念は、病状や体調の変化によって、自身が思うように動くことができないこと、もしくは思うようにできないだろうと思うことを指す。「自分にはできる力がある」と感じる自己効力感が低下しているとも言える。そのため、「一度、やってみよう」という思いが阻害される。本概念の存在は、先述の【仕事に関連した実現できない思い】に影響し、実現可能な思考への切り替えをますます困難にすることが示唆される。

②意思を示した者(A・Bさん)から抽出した概念

メンテナンス事業をきっかけに、今後の支援の展開について具体的な意思を示した者は2名であった。その語りから抽出した概念は2つであり、具体的な語りの例は Table 4 のとおりである。以下より、各概念の説明を示す。なお、概念名は、【 】と記載する。

【仕事に対する多元的な意味づけ】

本概念は、仕事に対する意味づけに多様性が増し、金銭面のみでなく様々な観点から、仕事に対する意味づけを行っている状況を指す。メンテナンス事業に参加する前には「お金をもらえること」以外の仕事に対するイメージが漠としていた、もしくは悲観的であった対象者であったが、メンテナンス事業参加という具体的な行動を通じて、様々な体験をすることで、多様な視点から仕事を捉えていくことが示唆される。

【今後の展開に対する具体的な思い】

本概念は、メンテナンス事業終了後の自身の在り方や方向性について、具体的な行動や内容を伴う発言が行える状況を指す。漠と「良いもの」、「あうもの」を求めているが、どうすればいいかがわからないという状況が変化し、次の展開に対し主体性をもって、具体的に考える思いが高まったことが示唆される。

③意思を示していない者(C・D・Eさん)について

メンテナンス事業を行ったが、今後の就労等の展開について具体的な意思を示していない者は3名であった。

意思を示していない3名は、メンテナンス事業の中で、金銭面以外のメリットを特段感じ取ることができなかった、もしくは感じているが漠としていられる。また、メンテナンス事業の先に支援の展開があるという意識が薄いことが、「この企画がなくなったら、困る。」としか語れなかったDさんや、「これが一つの区切りなので終わります。」と語ったCさんからうかがえ、次の展開に対する主体性が高まらなかったことが示唆される。

Table 4 参加終了時の語りから抽出した概念の具体例

概念名	意思を示した者(A・Bさん)の語り	意思を示していない者の語り
仕事に対する多元的な意味づけ	<p>○目標設定 どこに目標を置くかで変わる・・・給料が欲しくて来るのか、準備として来るのかによってかわる。</p> <p>○対人関係で得るもの ＜作業していて楽しいことは？＞汚れがきれいになると、整理整頓されること、お金がもらえること。あと、褒められること・・・褒められるというか「頑張りましたね」とか言ってもらえるところ。</p> <p>○報酬の意味 私、障害年金だけだったら他の日本人の人から税金を搾取して・・・とって分配されているから・・・う～ん・・・なんとなく運命を感じていたけど、自分で働いてお金を払うというのは楽しいというか、気持ちいいなって・・・。</p>	<p>仕事に対する意識は金銭が得られる点に終始する。もしくは、漠としている。</p>
	今後の展開に対する具体的な思い	<p>ここは確か紙の箱を組み立てているみたいなんですよ。それをしてみたいなって思います。</p>

④全体を統合したストーリーラインの生成

各期や事例の辿った経過をもとに抽出した概念を生成した結果、Figure 1の結果図が作成された。

「メンテナンス事業参加初期の語り」では、仕事に対する否定的・悲観的な思いや、仕事をする事に対する一元的な意味づけ、病状や体調の変動などに対する不安などから構成される「漠とした仕事のイメージ」があり、そのイメージが支援者や周囲のもつ仕事のイメージ(何かしらの日中活動があったほうがよいだろう・仕事をする事でやりがいや達成感などが得られるだろうなど)と共有されないことで、支援の方策へ反応を示さないというストーリーラインが示唆される。

しかし、メンテナンス事業においては「賃金が得られる」という具体的、且つ明確な目標があり、その目標を得たいという思いは、対象者も支援者も、自ずと共有できる設定である。その明確な強化子が動機づけのきっかけとなり、漠としたイメージの中で、支援者や周囲と思いのすれ違いがあった仕事について、「それなら、やってもいい。」という具体的な行動を伴った心理的変化が生じたのではないだろうか。

「メンテナンス事業をきっかけに、今後の就労などの展開について具体的な意思を示した者の語り」では、メンテナンス事業の中で、「仕事をしてよかったこと」を金銭面以外にも見出したことが共通している。賃金が得られるという外発的動機づけのみでなく、「仕事をする事で、感じた私の思い」として、やりがいや所属感などの、内発的動機づけを得ることができたことが、大きく作用していることが示

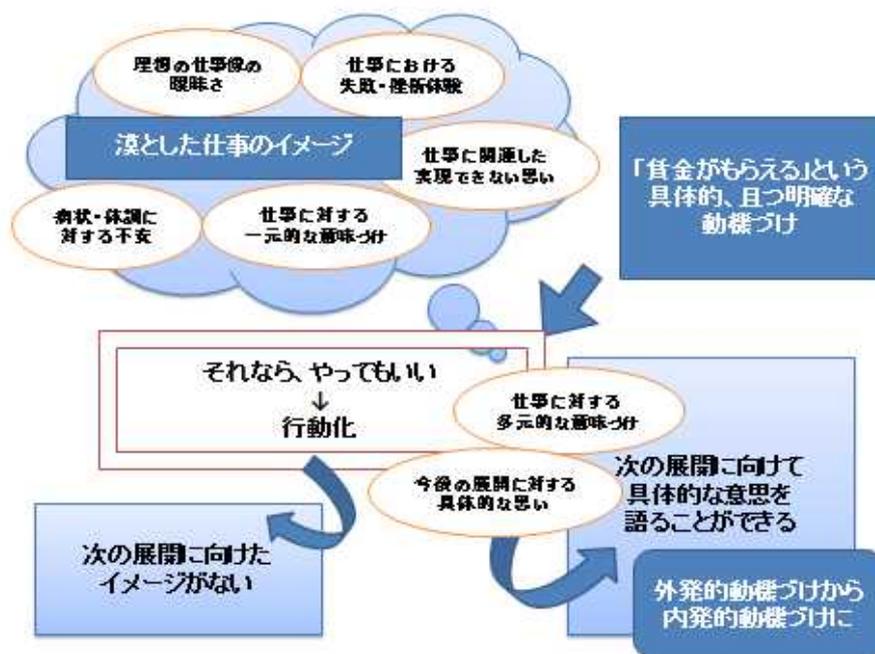


Figure 1 結果図

唆される。また、「この企画が終了になったらどうする？」という問いに対し、代替え案を自ら具体的に述べる事ができた点も共通しており、メンテナンス事業をきっかけに、「では、次にどうしようか。」という展開を主体的に考える思いの高まりを感じられた。

「具体的な意思を示していない者の語り」では、意思を示した者とは対照的に、金銭面以外のメリットを特段感じ取ることができず、仕事に対する意味づけの広がりが生じなかった。つまり、メンテナンス事業の動機づけが、外発的なものから内発的なものへ派生しなかったと考えられる。

つまり、対象者の辿るストーリーラインは、「漠とした思いに囲まれた状況」から「具体的、且つ明確な動機づけによる行動化」が生じ、その中で「今までの漠とした思いに対し、多元的な意味づけができるかどうか」という流れである。この多元的な意味づけにより、内発的動機づけが生じ、今後の展開に向けて「自分はどうしたいのか、どうすればよいのか。」という思考を巡らせることができるのだ。

IV 考察

本研究により、スモールステップをイメージした就労体験による「対象者の心的葛藤、体験を通じての心理的变化」について明らかにすることができた。

対象者は、メンテナンス事業に至るまでは、仕事に対し「しなきゃいけないとは思っている。」「何か自分に適したことがしたい。」など、それぞれの思いはあるものの、漠としており、行動に結びつけることが難しかったようである。しかし、その状況に具体的、且つ明確な動機づけが生じることで、行動化が生じた。このことから、トークン・エコノミー法を用いた就労体験は有効であったと考えられる。

その中でも、次の支援へつながるであろう対象者は、メンテナンス事業の中で様々な体験を積みながら、「仕事に対する多元的な意味」を見出していることがわかった。具体的には、仕事をすることで感じるやりがい、他者から認められていると感じること、自分が何を目指してメンテナンス事業に取り組もうとしているのかという目標の設定や捉えなおし等、見出した意味は多様であった。動機づけに

は、興味や楽しさから自発的に取り組む内発的動機づけと、他者からの要求や外的報酬からによって生じる外発的動機づけがあると言われている。また、松元(2014)は「動機づけは目標の価値づけと捉えられ、目標の価値は動的に変容する。」と論じている。メンテナンス事業を通して、目標の価値が変容し、外発的動機づけから、内発的動機づけに意識が向いたと言えるのではなかろうか。

一方、内発的動機づけによって行われていた課題に対して、報酬などの外発的動機づけを付加すると、目標の価値の変容が生じ、内発的動機づけが低下するという「アンダーマイニング効果」の存在が知られている。また、内発的動機づけは、その課題を自ら選んで行っているという自己決定感に支えられているとも言われている。本研究では仕事に対する動機づけのない状態から介入が始まっているため、アンダーマイニング効果の機序とは異なるプロセスを進んでいるが、内発的動機づけと外発的動機づけの相互の関連性は意識する必要があるだろう。

賃金が得られるという具体的、且つ明確な提示は、わかりやすい反面単純だとも言い換えられ、本研究より、仕事という複雑で持続的な活動を支持する動機としては、単純明快なもの以外にも、多様な動機づけが求められることが示唆された。漠とした状態に対し、具体的、且つ明確な提示を行う外発的動機づけが行動化に対し強く作用し、その次の展開として、行動の中で多様な動機づけを得ること、特に内発的動機づけを得ることが、支援がつながるプロセスに必要とされるのではないだろうか。

V 結語

障害に対する支援の場では、福祉的就労という選択肢があるが、ある程度の生活リズムや作業ができる能力が求められ、一般就労よりは支援の手が届く場であるものの、気軽に利用できるとは言い難い。また、多くの障害者が就労挫折体験を持ち、新たな取り組みを始めるためには大きな動機付けが必要となろうと予測した結果、メンテナンス事業及び、本研究の企画・実施に至った。

支援者は、自身の価値観の中で「働くっていい事だよ。」、「役割があるって素晴らしいよ。」と言ってしまうがちなのではないだろうか。本研究で明らかになったプロセスを意識すると、対象者は漠とした中で、仕事に対する理想や過去の体験に基づく悲観的な思い等に、飲み込まれている状況が伺える。対象者が漠とした中に存在しているのに、支援者も漠とした「概念的な提示の仕方」であれば、その提示が行動に結びつかないであろうことは、安易に想像できる。行動するには何らかの動機づけが必要であり、それは障害の有無に関わらず共通していると言えよう。その動機づけの1つとして「労働の対価として得られる賃金」という、ある種当たり前である設定を持ち込んだのがメンテナンス事業であった。

その結果として、支援センターでは、普段のサロン活動などではアプローチが難しい対象者に介入することができた。つまり、支援利用に対する動機づけが低い対象者への「介入のきっかけづくり」ができたことになろう。そして、その内の一部の対象者は、次の支援に対するイメージを持つことができ、まさにこのメンテナンス事業が、支援のスモールステップとなった。

本研究により、メンテナンス事業は、「介入することが難しいケースへの接点づくり」と「仕事に対する漠としたイメージからの離脱」という点で大きな効果をもたらしたと言え、その効果が生じるためのポイントは、トークン・エコノミー法を活用した外発的動機づけであると考えられる。また、その中で、仕事に対する多元的な意味づけが生じ、外発的動機づけが内発的動機づけに派生することが示唆された。つまり、最初の行動変容としては外発的動機づけが重視され、経験を積む中で次の支援へ展開す

るためには、内発的動機づけが重要であるということである。さらに、次の展開を示していない者に対しても、「メンテナンス事業を行った」という、具体的な行動を軸にした話が支援の中でできるということは、今後の介入に有効なのではないだろうか。

今後は、本研究で得られた仮説が検証できるような就労体験プログラムの検討と、今回の調査対象者について、メンテナンス事業で得られた意味づけや動機づけの変容、メンテナンス事業に参加したというきっかけそのものがどのような作用を見せるかという縦断的な研究が必要である。

最後に、本研究の企画・実施にご尽力いただいた社会福祉法人さわらび福祉会支援センターこのゆびとまれの金子所長はじめスタッフの皆様、研究実施の機会をいただいた滋賀県立リハビリテーションセンターの皆様に、深くお礼申し上げます。

VI 引用参考文献

- 石田晋司・岩切昌宏・石橋正浩・Kirsti Kuusela・Annika Rudqvist・Bengt G.Eriksson・二文字理明 (2008). 精神障害者の地域生活支援に関する研究 (I)——日本とスウェーデンにおける日中活動の場の実態 大阪教育大学紀要, **57**, 137-149.
- 池内伸明 (2012). 「ひきこもり」経験者の生活 教育福祉研究, **18**.
- 氏原 寛ら (2004). 心理臨床大事典, 培風館.
- 岡田 涼 (2010). 小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化——動機づけ概念間の関連性についてのメタ分析 教育心理学研究, **58**, 414-425.
- 奥田健次 (2005). 不登校を示した高機能広汎性発達障害児への投稿支援のための行動コンサルテーションの効果——トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った投稿支援プログラム 行動分析学研究, **20**, 2-12.
- 小林正幸 (1984). 登校拒否治療における継時近接法およびトークン・エコノミー法の役割について 行動療法研究, **10**, 44-51.
- 小林正幸 (1985). 登校拒否治療における継時近接法とトークン・エコノミー法の併用法の役割について 行動療法研究, **11**, 42-50.
- 須藤邦彦 (2010). 自閉性障害児におけるトークン・エコノミー法による援助行動の獲得と般化——家庭や学校場面への連鎖を達成する随伴性の整備 特殊教育学研究, **48(3)**, 211-223.
- 澄井友香・長澤正樹 (2003). 自閉症の自動の清掃スキル獲得に対するセルフマネジメントの効果 特殊教育学研究, **41**, 425-432.
- 田中道治 (2003). 精神遅滞児(者)の外的指向性に関する発達的研究 特殊教育学研究, **41(3)**, 317-323.
- 林 芳博 (2007). 地域生活支援事業の現状と課題——埼玉県における実施例をもとに 医療, **61(3)**, 195-200.
- 松元健二 (2013). やる気と脳——価値と動機づけの脳機能イメージング 第37回日本高次脳機能障害学会学術総会講演抄録, 74.
- 山根 寛 (1997). 精神障害者地域生活支援事業について 作業療法, **16(2)**, 94-97.